関原与市

シテ　源牛若
トモ　従者
ワキ　関原与市
ワキヅレ　従兵

地は　美濃
季は　雑

シテ、トモ次第「身は定めなきうたかたの。〳〵。消えぬぞ恨みなりける。

シテサシ「是は義朝の末の子。牛若とは我事なり。さても平家の栄え。安芸の守清盛が子供。一寺の賞翫他山の覚え。立ち交はるも憚りなれば。東とかやに下らんと。

下歌「忍びて出づる鞍馬寺。

上歌「心尽しの春の夜の。行方も知らぬ旅衣。消えぬ限

りは白雲の。野山を分けて美濃の国。山中に早く着きにけり。〳〵。

トモ詞「是より東へは程遠く候ふ程に。御心静かに御下向あれかしと存じ候。

シテ詞「さらば心静かに下らうずるにて候。

トモ「えい何と申すぞ。関原与市美濃の国中川の庄を賜はり。唯今入部仕ると申すか。や。是は一大事の御事にて候ふ間。よく〳〵御忍びあれかしと存じ

候。

シテ「さらば深く忍ばうずるにて有るぞ。此方へ来り候へ。

ワキ、ツレ一声「山風の。声吹き立てゝ行く道の。音は嵐の花の雪。

ワキ詞「そも〳〵是は関原与市とは我事なり。さても美濃の国中川の庄を賜はり。今日入部仕り候ふ所に。在所に柵を引き城郭を構ふるよし承り候ふ間。唯今手勢七十騎を以て。彼在所へ押し懸け候。さて

も当国中川の。其城郭を落さんと。

一同歌「まだ夜深きに関原の。〳〵。山の岩角踏み馴らし。駒うち続く武士の。猛き心を案内にて。急ぎて行けば程もなく。山中に早く着きにけり。〳〵。

ワキ詞「急ぎ候ふ程に。是は早山中と申す在所に着きて候。如何に誰かある。

ツレ詞「御前に候。

ワキ「是より中川へは程遠く候ふ程に。人馬に息をつか

せ候へ。

ツレ「畏つて候。

シテ詞「不思議や見れば侍なるが。旅の衣に馬の蹴上を懸くる事。存外あまりの振舞なり。いかに与市。其馬乗り得ずは。下りて下人に牽かせ候へ。

トモ「如何に申し上げ候。あれなる冠者が申す事は。与市殿の御馬。其馬乗り得ずは。下りて下人に牽かせよと申し候。

ワキ「何と申すぞ。急ぎ其冠者討ち取つて。今日の軍の血祭にせよと。与市が下知に随つて。

地「究竟の兵七十余騎。切先を揃へて切つて懸かれば。牛若少しも騒がずして。静々と太刀抜きそばめ。敵を手近く待ちかくれば。我も〳〵とかゝる敵を。弓手に切り伏せ馬手に切り伏せ。小鳥稲妻石の火の。見あへぬ程に切り給へば。嵐に木の葉の散るが如く。大勢は乱れ散つて。四方へばつとぞ逃げ

たりける。

地「其時与市は怒りをなして。〳〵。物々しあれ程の。小性ひとりを。手並にいかで洩らすべきと。駒駆け寄せてえいやと打つ太刀を。飛びちがひ斬り落し。駒引き寄せてゆらりと打ち乗り。太刀指しかざし。我は知らずや源の。牛若と名乗り罵り。美濃の中道。東路さしてぞ下りける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第九輯』大和田建樹 著